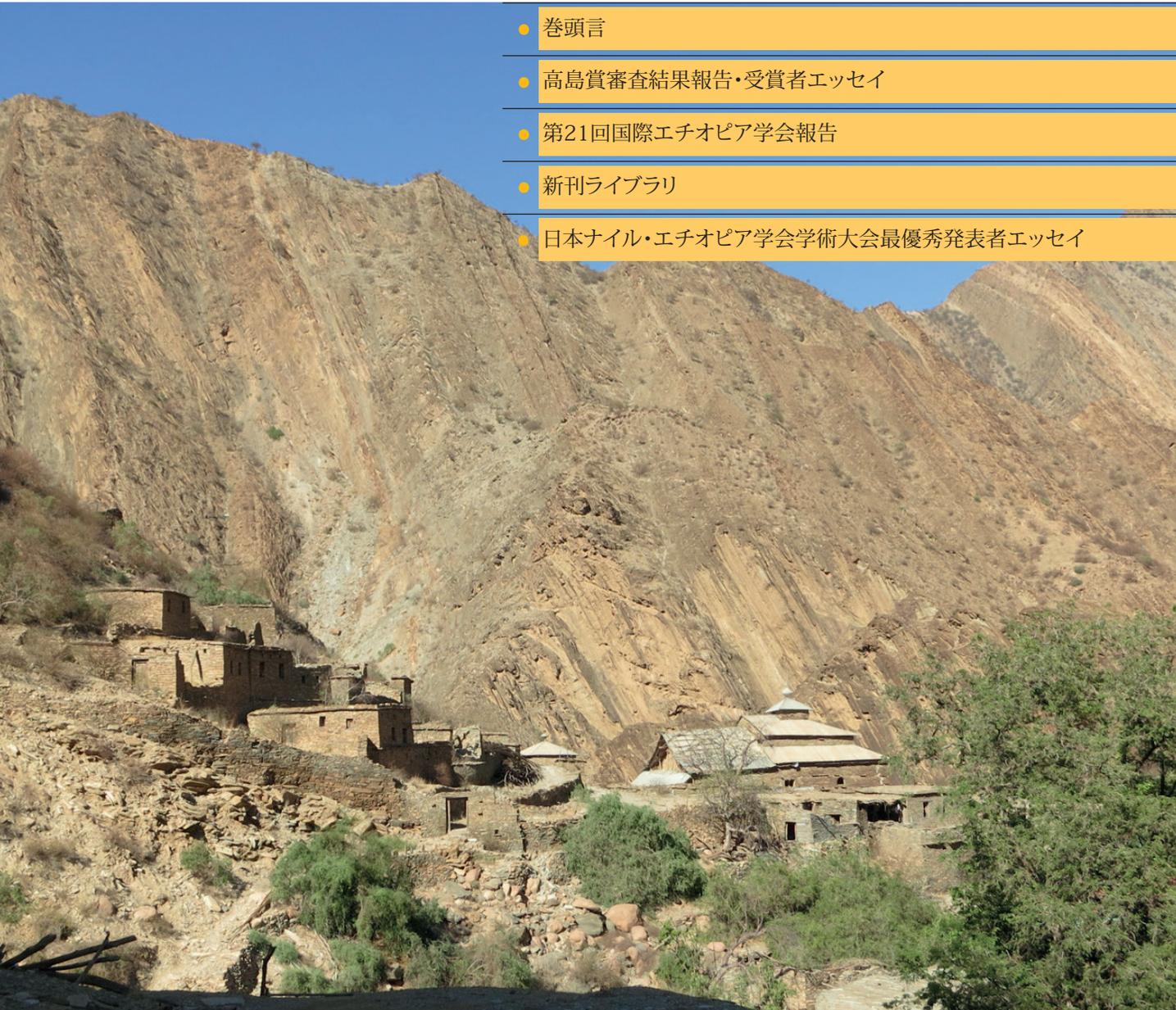


JANES

ニュースレター

No. 30-2
Mar. 2023

日本ナイル・エチオピア学会

- 
- 巻頭言
 - 高島賞審査結果報告・受賞者エッセイ
 - 第21回国際エチオピア学会報告
 - 新刊ライブラリ
 - 日本ナイル・エチオピア学会学術大会最優秀発表者エッセイ

巻頭言



Yukio Miyawaki

宮脇 幸生

(大阪公立大学)

「アディスでいちばんの繁華街は…ピアッサだ!」エチオピア人からそう聞いて私が思い浮かべたのは、道頓堀のようなネオンきらめく街並みだった。1985年のことである。初めてのエチオピア、その繁華街に胸を躍らせて訪れたアディスアベバ随一の繁華街ピアッサは、しかし、2階建ての古ぼけた建物の立ち並ぶ、田舎の商店街のようなところだった。「アディスアベバは、巨大な村だ…」私は、そう思った。あれから40年…

エチオピアはこの十数年ほどで、すさまじい経済成長をとげた。2004～2017年の経済成長率は、10%近い。世界トップクラスだ。自動車道が張り巡らされ、鉄道が開通し、巨大ダムがつくられる。アディスアベバには高層ビルが次々に建設され、町のようには一挙に変わった。2014年、この高度経済成長のど真ん中、久しぶりにエチオピアを訪れた私は、アディスアベバで迷子になりかけた。見知った道や建物が、なくなってしまったからだ。巨大都市でさまよう、田舎出の異邦人。立場は逆転した…

しかしどのようにして、エチオピアはこんなに発展したのだろうか?冷戦終結後1990年代の混乱期を経て、2000年代にアフリカ経済が成長の波に乗ったのは良く知られている。混乱の収束とともに、石油や鉱物資源の開発と輸出が進んだためである。だがエチオピアにどんな資源があるというのか?

エチオピアの経済統計を見ると、増加する輸出に比べ、輸出は低調、巨額の債務を抱えていることがわかる。輸入した資材はインフラ建設に用いられ、次々につくられる巨大なビルや鉄道やダムが、人々の目に経済成長の成果として焼き付けられる。エチオピアの経済成長は、国家主導の建設業がけん引してきた。そしてそれが、政権の強権的政治運営を正当化してきた。だが、その原資はどこから来るのか?

ある研究者によれば、経済成長の資金源は、第一に国営通信事業などを通して吸い上げられる国内資金、第二に外国のODAと譲許的融資、そして第三に外国資本による海外直接投資だという。国外からの資金の流入が、巨額の貿易赤

字と外貨の流失をなんとか埋め合わせているのだ。ではなぜ海外から資金が流入するのか?エチオピアは三方を、「崩壊国家」や「テロリスト支援国家」に囲まれている。その中で政情が安定しているエチオピアは、重要な地政学的役割をもつとみなされてきたからだ。そしてアフリカ第二の人口を擁し、明確な開発理念を掲げるエチオピアは、有望な先行投資の場でもあったからだ。

でも、もしこれらの条件が成立しなくなったら、どうなるだろう?経済成長の中で、それはありえない想像に思えた。だが2020年、戦争が始まった。2023年現在、それがどのような結末を迎えるのか、まったく見通すことはできない。インフラを整備し、大学をたくさん作り、「人的資源の開発」も進めてきた。エチオピア経済は、これから離陸して、大きく羽ばたくはずだったのに…

2021年の経済成長率は、5%台を維持している。だがこの先は…政治に続いて経済まで、歯車が逆回転しないことを願わずにいられない。

日本ナイル・エチオピア学会第28回 高島賞審査結果報告

村橋勲

『南スーダンの独立・内戦・難民——希望と絶望のあいだ』、昭和堂、2021年。

村橋勲氏の上記著書について、選考委員会は第28回高島賞受賞にふさわしいと判断した。その理由は以下である。

本書は、南スーダンおよびウガンダの難民居住地区におけるフィールドワークに基づいた、紛争・平和構築および難民の生活世界に関する実証的研究である。著者は、2013年から南スーダンにおける平和構築、2014年からウガンダの難民居住地における南スーダン難民の移動や社会生活、そして難民への人道支援に関して、長期のフィールドワークに基づき調査研究を進めてきた。本書はその研究活動の集大成であり、序章と終章を含む9章によって構成される。前半部では、南スーダンの独立から内戦に至るまでの過程や周辺地域の歴史、移動のパターンが検討される。後半部はウガンダの難民居住地でのフィールドワークに基づくデータからなり、難民居住地における支援活動、難民自身による生計活動や難民居住地内外の社会関係などが論じられる。本書が高く評価される主な点は、以下である。

第一に、難民居住区におけるフィールドワークに基づき、南スーダン難民のミクロな経済活動や協働性、他者との交渉の技法、その中から生みだされる難民社会の多様性を見事に描き出している点である。例えば第5章では、難民の農業生産に対する意識や文化的価値規範と、農業生産プロジェクトを推し進めようとする支援側の想定とのずれが指摘され、既存の支援がうまく機能しない現状について事例とともに検討されている。この中で見えてきたのは、プロジェクト参画者として模範農家が選ばれることにより生じる支援を受ける人々の格差や不平等感や、支援する側が期待する「自立」という概念が、アフリカの村落共同体的相互扶助システムを考慮されないままに導入されている点である。これに対して第6章では、難民居住地内での農業生産から支援物資の利用・流用、そして出来高払いの賃労働など、さまざまな生計手段やネットワークが難民の暮らしを支えていることが明らかにされる。

第二に、難民および難民とかわる諸アクターが、ともに発展を遂げた新たな地域社会のあり方を記述した点である。アフリカの国境をめぐる特徴のひとつは、それが植民地統治期に恣意的に引かれたために、人々に領域

的・心理的分裂を生じさせたと同時に、国境をめぐる高い透過性が創り出され、人々の頻繁な往来を促した点にある。本書では、繰り返される内戦により、人々の社会関係や帰属が流動的で複雑になっていることが示され、この中で難民居住地をはじめ、ウガンダー南スーダン国境地域において地域社会が発展してきたプロセスが細やかに描かれている。特定の民族集団や社会集団という単位で対象を切り取ることをせず、難民というアクターによって生み出されるナイル・エチオピア地域の流動的な社会形成の現場を捉えている点は高く評価できる。さらに、南スーダンの内戦やウガンダの難民支援モデルは、国際社会や国連機関からの注目度も高く、北東アフリカ地域における人道支援の実態をフィールドワークに基づき綿密に分析した本書は、地域研究においても貴重な事例研究となることが期待される。

第三に、緻密なデータに基づき展開される、既存の人道支援に対する分析と批判的検討である。本書は、世界のさまざまな地域で導入されている人道支援アプローチの変化に注目し、自立やレジリエンス強化を強調する昨今の支援アプローチの実態を、支援の現場の詳細な観察に基づき批判的に分析している。例えば「自立とレジリエンスの名の下で、彼らの自立に必要な環境と資源を十分に与えられないという現在の難民支援制度の限界を、難民自身の能力の問題として解決しようとしている」(本書p.179)という指摘は、当該地域のみならず、世界各地の難民支援の現場に当てはまる現象であろう。支援プロジェクトの行き詰まりや支援する側・される側の非対称性は、単に支援の与え手側と受け手側という単純な構図の中に存在するのではなく、ウガンダ政府やUNHCR、各種NGO、ホスト住民や難民側の代表といったアクターの思惑や期待が複雑に絡み合いながら発生している。本書では具体的な事例のなかでこれらの錯綜するアクターが描かれており、それに基づき展開される議論は、今後地域を越えて強制移動研究や、人道支援・開発援助研究を導くものになるだろう。

本書が抱える課題として、支援プロジェクトのなかで十分に検討されていないとされるアフリカの相互扶助的協働性や疑似的家族の形成、あるいは文化的実践といった、文化・社会システムのさらなる分析・記述があげられ

る。文化・社会システムは、移動先で新たな共同性を育む一方で、断絶を生み出すこともあるだろう。加えて、流動性が高く、実に様々なネットワークや文化システムを駆使する人々を、どこまで定住至上主義者が所与のものとする「難民」という概念・用語で括ることが適切かどうかとも検討する余地がある。支援する側とされる側というタテの階層はもとより、ヨコの集団内外でのシステムの変動やシステム間の相互作用を捉え、そして分析概念自体を問い返すことができるのならば、難民の民族誌、あるいは地域史研究として著者の研究の価値をさらに高めることになるに違いない。

清水信宏

「エチオピア・ティグライ州における都市・建築史に関する研究活動」

清水信宏氏の上記の研究活動について、選考委員会は第28回日本ナイル・エチオピア学会高島賞受賞にふさわしいと判断した。

清水氏は、2008年よりエチオピアのティグライ州において都市と建築の歴史に関する研究を開始し、メケレ大学での講師赴任(2013年9月～2015年3月)や、グンダ・グンド修道院(14世紀創建のデブレ・ガルゼン聖堂)の修復プロジェクトへの参加を通じ、この地域の伝統的な集落、宮殿、教会、住居等の建築に関する知見を深めてきた。これまでの一連の研究の成果として、査読付き論文6本(Nilo-Ethiopian Studiesへの投稿1本を含む)を発表している。本学会学術大会においては2度(2015年度と2017年度)、最優秀発表賞を授与されている。

清水氏の研究活動で評価できる点は、既往研究が殆ど存在しなかった19世紀以降のティグライ州の伝統的な集落とそこに点在する建築に着目し、それらの特徴を、当該地域社会の歴史的な変遷を踏まえつつ解明したことにある。清水氏は、当時この地域に滞在した外国人による旅行記の記述やスケッチの分析、現存する集落や建築の実測、技術者や住民へのインタビューを着実に積み上げていった。その結果、集落において居住地が斜面の中腹に形成され、農地は川や水辺に近い斜面の下の方に、教会は斜面の上の方に位置することが一般的であることを、その理由とともに明らかにしている。また、建築においては、宮殿、教会、住居の、間取り、寸法、窓の有無といった計画面や、材料、工具、加工方法といった技術面について、イタリアの技術の影響なども踏まえつつそれらの変遷を明らかにしている。

特に近著「Nobuhiro Shimizu, Alula Tesfay Asfha. 2021. Historical orientation of Yohannes IV Palace in Mekelle, Tigray State, Ethiopia, from the aspects of planning and building techniques. *Japan Architectural Review*. pp.44-63」は、清水氏の研究活動の集大成と捉えられ、19世紀以降のティグライ州の建築を語るうえで欠かせないヨハネス4世宮殿の敷地と建築の特徴を考察したものである。

以上の理由から、本書は第28回の高島賞授与にふさわしい業績であると判断するしだいである。

2022年3月13日

日本ナイル・エチオピア学会 第28回高島賞選考委員会
川瀬慈委員長
設楽知弘委員
橋本栄莉委員

伝統的な集落に関する清水氏のこれまでの研究成果に基づき、宮殿の立地や城郭の構成について防御面を踏まえて考察している点や、建築に関する研究成果に基づき、宮殿の建築の特徴について、間取り、寸法、建築各部材(壁、窓、柱、梁、天井など)、材料、工具、加工方法といった側面から分析している点、更にはイタリア人技師のジャコモ・ナレッティが建設に大きく貢献した点を明らかにしたことが評価される。

エチオピアにおける都市と建築の歴史に関する研究は、欧米や日本等の研究者が中心であった時代と比べると、近年はアジスアベバ大学建築・都市計画研究所(EiABC)やメケレ大学を中心とするエチオピア人研究者の活躍が少しずつ見られるようになってきている。清水氏の査読付き論文6本のうち、5本はエチオピア人研究者との共著である。エチオピア現地の研究者との密なコラボレーションを通して、当該分野の研究の裾野を広げてきた清水氏の貢献は計り知れない。とはいえ、いまだにエチオピアの都市と建築を対象にした研究者は決して多くはない状況であるからこそ、清水氏には今後とも、エチオピア現地の研究者との協働を含む、国際的な共同研究の企画を期待するとともに、研究対象の地域や時代を徐々に広めていってほしいと願う。

上記の理由から、全員一致で清水氏の研究活動を評価し、第28回日本ナイル・エチオピア学会高島賞受賞にふさわしいと判断した。

2022年3月13日

日本ナイル・エチオピア学会 第28回高島賞選考委員会
川瀬慈委員長
設楽知弘委員
橋本栄莉委員

日本ナイル・エチオピア学会第28回 高島賞受賞者エッセイ

「第28回高島賞受賞に寄せて」

Isao Murahashi

村橋 勲（静岡県立大学）

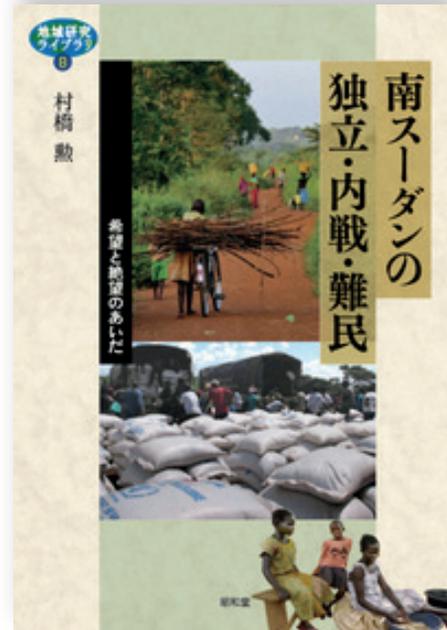
この度、拙著『南スーダンの独立・内戦・難民——希望と絶望のあいだ』（昭和堂、2021年）に第28回高島賞を授与していただき心から嬉しく思います。これまで研究を支えて下さった先生方や賞の選定にかかわった先生方に深く感謝申し上げます。

本書には「希望と絶望のあいだ」という副題がついています。本書の執筆にとりかかった時、こちらを主題にしていました。この名前には、私のフィールド経験が大きくかかわっています。そこで、本書を著すまでの紆余曲折についてふれておきます。

2012年末に初めて南スーダンに入国した時、同国は「希望の国」と言われていました。前年の7月、南スーダン共和国は、22年に及ぶ解放闘争の末にスーダンから分離独立を果たし、世界に新しい国家として誕生したばかりでした。国内の治安は必ずしも落ち着いていたわけではありませんが、独立の興奮冷めやらぬ頃だったと思います。私は、紛争後の農村社会における社会経済的な変化に関心があり、指導教員である栗本先生の勧めで、ナイル系の農牧民、ロピットに関する調査を始めました。しかし、2013年に本格的に始めたフィールドワークは、同年末に首都ジュバで勃発した銃撃戦により突然の中断を余儀なくされました。私は、一旦、南スーダンを離れ、紛争が収まるのを待ちました。この時、フィールドワークを一から見直さなければならぬかもしれないという不安がよぎりました。この不安は的中し、その後も続いた紛争のため、南スーダンでのフィールドワークは今も実現していません。

そのような状況で、まず南スーダンの政治情勢について理解しようと思いました。それは、ジュバでの銃撃戦が驚くほど短期間に各地での紛争へと拡大したことがあまりに予想外だったからです。国家の内情に無知だったことを痛感し、南スーダンに関する調査報告や報道資料などを逐一、追いかけることにしました。そのうち、どのように南スーダンという国家の破綻が生じたのかが少しずつ把握できるようになりました。ところが、こうした問いは、日本国内ではまともに議論されることがほとんどなく、紛争という言葉すら使用を避けられていた時もありました。そこで、本書をとおして、南スーダンの国家建設が抱える課題や矛盾を明らかにしたいと考えました。

ただ、本書の主な目的は、南スーダンという国家について分析することではありません。むしろ、国家や人道援助



といった大きな「装置」に翻弄されながらも、南スーダンの人々がどのように生き、明日への希望を持ち続けようとしているかについて考察することにあります。

それは、ウガンダのキリヤンドゴ難民居住地でのフィールドワークをとおして、難民の経験や生活を身近に知る機会を得たことによります。2014年にこの難民居住地で調査を始めた私は、さまざまな地域出身の南スーダン人と話し、住み込み調査ができる世帯を探し、NGOスタッフに帯同させもらう、などの方法で難民の生活に近づこうとしました。

さまざまな人々と付き合うなかでわかってきたのは、難民居住地に暮らす人びとは、たんに迫害や暴力を逃れるためだけでなく、さまざまな理由や動機で国境を越えてきたのだということでした。たとえば、若者の多くは、教育を続けたいという個人的な動機を強く持っていました。ウガンダに暮らす親戚や知人を頼って難民居住地を選ぶ人もいますし、学校に近いという理由でどここの難民居住地に行くかを定める人もいます。難民というと無力で希望を失った人々というイメージを持たれがちですが、何かしらの目的や願望を持っているからこそ「難民」になっているのではないかと思えることもありました。

フィールドで気づくことが通俗的な言説と異なるという例は他にもあります。たとえば、ウガンダの難民支援に対する一般的な理解と、支援に対する難民の捉え方にはズ

レがありました。2017年頃まで、国連機関やマスメディアは「ウガンダは難民の楽園である」ということをよく言っていました。ところが、実際には「楽園」に暮らしているはずの難民の生活はますます苦しくなっていました。これは、難民数の増加に伴う土地の狭隘化や資源の枯渇、法的な制度の限界、汚職などさまざまな問題が絡まり合っており、公的な支援制度の限界が見えつつありました。

支援をあてにできない時、人々は自活する方法を見つけ出さなくてはなりません。彼らは、トウモロコシや野菜を生産して販売したり、さまざまなピークワークを見つけたりして必要な現金を得ています。また、親族からの海外送金が困窮した生活の支えとなっている人も少なくありません。それぞれが何とか暮らしていく方法を探りながら、頼りにできる相手を見つけようとしています。いつしか私も「家族」の一員として扱われるようになり、フィールドに行かなくても、インフォーマントの状況がわかるようになりました。

私は、数か月ぶりにキリヤンドンゴ難民居住地に行った時、まずマルワ(シコクビエなどの雑穀から作られたドロク)を飲みに行きます。大抵、ウガンダ人と南スーダン人が一緒になって泡立った液体が入ったバケツを取り囲み、各々が長い木の枝のストローで酒を楽しんでいます。ここではウガンダ人と南スーダン人は酒を飲みあう間柄です。実際には、両者の間にはいろんなもめごともあるのですが、日常的なつきあいはふつうにみられますし、ウガンダ人女性と結婚した知人もいます。

ウガンダでフィールドワークを始めてすでに8年以上が経ち、最初はつかみどころのない場に思われた難民居住地も、そこに暮らす人々とともにいることで、少しずつそれぞれの人の生き方を理解できるようになりました。とはい

え、本書では、彼らが属する集団間の関係性を十分に明らかにできたわけではありません。講評の指摘にあるとおり、紛争と離散という文脈において、南スーダン人の集団内部でのシステムの変動や集団間の相互作用(ヨコのつながり)を考察するという事は検討すべき課題として残っています。

これまで調査研究を続けてこられたのは、日本ナイル・エチオピア学会の皆さまからの激励や、南スーダンとウガンダの「家族」の支えのお陰であると実感しています。改めて感謝申し上げます。今回の受賞を励みとして、移動と場所、移動と文化の関係性について、今後さらに研究を進めていきたいと考えています。



写真 私とロピット人の若者たち(キリヤンドンゴ難民居住地)
著者撮影、2017年8月

「第28回高島賞受賞に寄せて」

Nobuhiro Shimizu

清水信宏 (北海学園大学)

この度は、第28回日本ナイル・エチオピア学会高島賞を授与していただきましたこと、心より嬉しく思います。まず、今日までの研究を指導し支えてくださった先生方や諸先輩方、調査に協力してくださったエチオピアの人びと、賞の推薦と審査をしてくださったみなさまに深い感謝の念をお伝えいたします。

これまで、エチオピア・ティグライ州のメケレ周辺において、建物や都市に関するローカルな技術と知識、それらの19世紀以降の変容プロセスを明らかにすることを目的に研究活動をしてきました。歴史的に重要な建築を測ったり観察したり、現在残っている伝統建築技術のアーカイブをしたり、現地のビルダーの人々に対して伝統的な建築技術に関するインタビューをしたり、都市近郊の歴史的な地区のマッピングをしたり、そこに住む人々にファミリーヒストリーを聞いたり、といったような調査をしながら、建築や都市に関する変わりゆくローカルティについて、特に技術的な側面から考えてきました。

今回受賞対象としていただいた論文は、メケレで19世紀後半に建設されたヨハネス4世王宮について論じたものです。ヨハネス4世王宮は、イタリア人の職人であるジャコモ・ナレッティが建設に携わったことで知られていますが、対象地域の伝統建築について研究している目で見てみると、むしろ地元石材によるローカルな建築技術がよく利用されている、ということに目がいきます。しかし先行研究を見ると、どうにもイタリア人が関わっていたとする部分に引っ張られているように思われたため、実際に残っている建築そのものの分析を起点に論を進めることにしました。現存建築の構法や技術に関する分析を行ない、その上で、ナレッティ自身の残した日記や、建設当時に王宮を訪れた外国人による記述を検討することで、この建築の歴史的な位置付けについて議論しました。ナレッティの日記は、このメケレの王宮に関する詳細な記述をする前に終わってしまっている(少なくとも見つからない)のですが、彼がエチオピアでどうプロジェクトを進めていたの

かについては他の事例を通じて記されている所もあり、とても興味深いものでした。結果として、ナレッティがいかに対象地域のローカルな環境や建築技術を理解した上で対象建築の建設プロジェクトに取り組んだのかが分かったほか、彼が壮麗な王宮建築の実現のために導入した新たな道具や技術というのが、その後の対象地域における伝統技術の変化の基礎を作ったのではないかとこの考察をしました。

はじめてエチオピアを訪れたのは僕がまだ学部生だった時になりますが、そのときに見たく岩が剥き出しになった土地に石材の建物が建つという正直な風景というのが、今でも印象に残っています。石に着目して対象地域の建築や都市について考えるようになると、石を積んでも岩をくり抜いても建築はできることを学ぶことにはじまり、建物以外も塀や道路など至るところに石が使われていることを発見し、そして石積みの技術は食べ物を作るための段々畑をつくるのにも欠かせない技術であったことをやがて知るようになりました。調査の道中、雨が降って川を車が渡れなくなった時に、周囲に落ちていた石材を投げ込んで川に道をつくった時には「ここでも石か」ということもありました。

卒業論文や修士論文を書いた後、対象地域の土地やそこに住まう人びとのことをなんだか未だにうまく理解できていないと思うところがあり、メケレ大学の先史環境遺産

保護研究所に1年半の間所属をして現地で生活することにしました。この滞在やそこでの人との関わりは、その後博士課程へ進んで論文を書き上げていくにあたって、何か理解を身体化するのにも重要な期間だったように今となっては感じます。一番記憶によく残っているのは、グンダ・グンド修道院の修復事業の一環として、2015年にその準備プロジェクトとして外構修復の監督を行なったというものです。実際に周りにある石材を切って、敷地へ持ってきて、それを加工して積むという行為によって、壁が作られるプロセスを目の当たりにすることは、私の研究にとって、また建築とはなんなのだろうということを考えるにあたって、大きな意味を持つものでした。これらの経験を通じて対象地域のことをうまく理解できたのかという話に立ち返れば、むしろ分からないことが増えたというのが正直なところですが、ただ地域へのリスペクトは深まったと思える気はしています。

今後も、研究活動を通じて得られたローカリティへのリスペクトを、仲間とともに深め、そしてなにかいいと思える方向に少しでも進めていけるような研究や活動を微力ながら展開させていきたいと考えています。最後に改めて、ともにプロジェクトや研究を進めてきたみなさま、研究内容をお互いにおもしろがる機会をいただいたみなさまに感謝申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



写真 ヨハネス4世王宮 (著者撮影)

第21回国際エチオピア学術会議 参加手記

Eunji Choi

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)

2022年9月28日から10月1日までの4日間、エチオピアの首都アディスアベバで「第21回国際エチオピア学術会議(21st International Conference of Ethiopian Studies: ICES21)」が開催された。この会議は、アディスアベバ大学のエチオピア研究所(Institute of Ethiopian Studies: IES)が主催し、エチオピアとその周辺地域に関する諸課題を研究している300人以上の社会科学・人文科学の研究者が一堂に集うものである。第1回ICESは、1959年にイタリアのローマで開催された。その後、ヨーロッパ、アメリカ、エチオピアのいくつかの都市で開催されている。2018年にエチオピアのメケル市で第20回会議が開催されたものの、今回の第21回会議は、COVID-19の影響により約4年の時を経て開催に至った。

今回のICES21は、「Persistence and Resilience in Ethiopian Studies: Global Context and Developments」という全体テーマのもと、開催された。世界各国から約100名の研究者と約300名のエチオピア人研究者が参加した。最終日のビジネスセッションを除いた前半3日間参加者の内訳は、エチオピア人が1,011名、それ以外の国からの参加者が350名であった。会議は、社会科学棟(Social Science Building)、開発学科棟(College of Development Studies)、エチオピア研究所の3つの建物に分かれて行われた。エチオピアとその周辺地域に関する教育、音楽、政治、人権、食糧安全保障、ナイル紛争、宗教、ジェンダー研究、地理、言語などの多岐におよぶテーマからなる計31のパネルが用意され、社会科学棟に10パネル、開発学科棟に18パネル、IES棟に6パネルが配置された。同じパネルでも、午前-午後で構成されていたり、2つの会場で同時に発表されたりしているケースがあった。例えば、パネル8の「Linguistic, Literature, and Folklore」の場合、発表者は合計26名で、開発学科棟の講義室1と講義室28の2つの場所で2日間にわたってプログラムが行われた。

初日の朝は、参加登録、開会式、祝辞から始まった。オープニング会場は、Gänäta Le'ul(王者の天国)と呼ばれるハイレ・セラシエ皇帝の旧宮殿で、現在はIESのオフィスと図書館になっているラス・メコネンホール(Ras Mekonnen Hall)で行われた。エチオピア研究所のタケル・メリード(Takele Merid)所長は、「国際エチオピア学術会議は、エチオピア研究、そしてアフリカの角地域に関

する世界の研究者の間に帰属意識と連帯感をもたらす、権威あるユニークなフォーラムの一つです」と紹介した。その後、エチオピア連邦民主共和国のサーレワーク・ゼウデ(Sahle Work Zewde)大統領による祝辞が続いた。大統領は、アディスアベバ大学がエチオピアを代表する高等教育機関として、国のさまざまな分野で重要な役割を果たし、知識の発展と高度な教育を受けた人材の輩出に中心的な役割を担っていると述べた。オープニングイベントの後、IESの建物の外では、エチオピア南部に暮らすダウロ民族の舞踊団の歓迎のパフォーマンスが行われた。個人プレゼンテーションは、大会初日の午前中に始まった。パネル数が31に達したため、複数の会場で同時に実施された。発表時間はパネルによって異なり、1人あたり15~20分で、3つ以上の連続発表の後、30分程度のティーブレイクと30分程度のディスカッションが行われた。ほとんどのパネルがスムーズに進行した。ただし、会場によっては運営上の問題が見受けられた。30日にNCR講義室113で行われたパネル「Social Anthropology and Cultural Studies」は、午前11時に始まるはずだったが、会場が変更されたとの張り紙があった。当日、それもパネルの開始20分前にそんな変更がなされたことにも驚いたが、もっと驚いたのは、発表開始の11時を過ぎても、会場が施錠されていたことだった。結局、私を含め多くの人が参加を断念した。

私は4つほどのパネルに参加したが、そのうち2つのパネルのテーマが興味深いものであった。まず、「Language Education in Ethiopian Primary Schools」は、エチオピアの言語教育に関するパネルで、初等教育だけでなく、言語習得の方法やエチオピア正教会の教育制度に関する研究なども取り上げられていた。このパネルは、総勢10名の発表者があり、午前と午後の3つのセッションで構成されていた。パネルの参加者は、発表者、聴衆を含めて10名程度であった。午前中の発表では、エチオピア正教の教育制度は真に近代的なシステム化がなされているのか、それとも単に過去に留まった陳腐な制度なのかについて、白熱した議論が展開された。芸術に関するパネルは、京都大学の相原進特定研究員とアヅマスアベベが担当した「Cultural Music, Instruments, Dance, and Related Independent Knowledge in Present day Ethiopian Tourism」で、約25名が参加した。エチオピア国立劇場でダンスが踊る伝統舞踊の歴史、アディスアベバの国際映画祭を通じたパン・アフ

リカ主義の見直し、ミュージックビデオを通じたアデイスアベバのイメージの変化などが紹介された。セッション終了後、ティーブレイクが実施された。ティーブレイクの会場では、エチオピアの伝統的な軽食であるアナババロ(Anababaro)、クッキー、パン、コーヒー、紅茶などが用意された。そこでは、発表者と聴衆が活発に意見を交換し、語り合う場が設けられた。30日の会議終了後には、ICES21に参加した著名な教授や日本人研究者の交流を図るため、日本大使館公邸でイブニング・レセプションが開催された。ここでは、会議中に話すことができなかった様々な先生方と交流し、連絡先を交換することができた。日本からエチオピアに来て1週間しか経っていなかったが、日本食はさすがに素晴らしく、美味しかった。特に、内陸の国であるエチオピアではなかなか食べられない寿司、たたき、おでんは、参加者全員が喜ぶほどの味だった。日本大使のお招きにより、3日間の会議が楽しい雰囲気の中、終了した。

今回のICES21に参加したことで、エチオピアに関する様々な研究発表を聞くことができ、自分の知識を広げる

良い機会になった。また、多くの発表者と交流することができて、今後の研究の方向性について考える時間を持つことができた。COVID-19の危機的状況下でも、このような素晴らしいフォーラムが開催できたのは、準備に携わった方々の努力と機知に富んだ進行のおかげだと思う。3年後の会議では、また多様な方々と意見交換する機会を持ちたいと思い、今回の参加手記を終わる。



写真3. 開発学科棟



写真1. オープニング会場であるラス・メコネンホール



写真4. パネル“Cultural Music, Instruments, Dance, and Related Independent Knowledge in Present day Ethiopian Tourism”での発表者



写真2. ダウロ民族の舞踊団のパフォーマンス



写真5. 日本大使公邸でのイブニング・レセプション

新刊ライブラリ

相原 進

『ダンス・イン・エチオピアー伝統的ダンスにおけるダンサーたちの創造と実践ー』、松香堂書店、2021年。

Ayaka Tanaka

田中綾華

(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

本書は、エチオピアの首都アディスアベバ特別市にある国立劇場において、伝統的ダンス(ダンス)が継承される様子や、新たな演目が創造される過程を手がかりにして、伝統的ダンスの多様性が増加している様子をえがきだしている。ダンスは、冠婚葬祭や、人々の日常的な交流の場面のほか、国立劇場をはじめとした4つの劇場、ホテルやレストランなどで演じられる。

本書の2、4、5、6章では、アディスアベバ市内の国立劇場と、レストラン4店舗における、ダンスの実践について描かれている。3章では、ハンガリー人のダンス研究者であるティボール・ヴァダシに注目し、彼がアディスアベバ市内におけるダンス教育に与えた影響について述べられている。エチオピア都市部のダンス教育に対してヴァダシが与えた影響は大きく、国立劇場による演目の創作は、「地域・民族を単位として演目を立てる」、「基本的な動作の組み合わせによって演目を創作する」という2つの特徴があることを、著者は指摘している。後者について、本書では、著者自身による習得やビデオカメラを用いた撮影をとおして、国立劇場で上演される26演目から262種の基本的な動作が確認された。これらの基本的な動作は、国立劇場だけでなく、アディスアベバ市内のホテルやレストランで働くダンサーたちも共有している。アディスアベバ市内のレストランで上演されるダンスは、観光化と、それに伴う表現の多様化が進み、観客とダンサーがコミュニケーションをとることを目的とした演出が加えられるなど、基本的な動作をもとにしつつダンス表現に広がりが見られることが指摘されている。

このようなダンス表現について、本書は、ひとりのダンサーを対象に、同一の演目を国立劇場でダンサーと一緒に踊る場合、レストランでソロパートとして踊る場合、レストランで観客と一緒に踊る場合、という3つの状況で踊ることを想定し、ダンサーが状況に合わせて演じ分ける様子を詳述している。ここでは、状況に合わせたダンス表現の比較分析のため、映像式モーションキャプチャが用いられた。ダンスを記録・分析する方法については、身体動作を言語化することの難しさや、動作の分析を進める際の調査者と演者による視点の違いについて議論が重ねられてきた。近年の撮影録音機器の性能が良くなったことに伴い、フィールドで映像式モーションキャプチャの使用が可能になり、映像を見ながら調査者と演者がパフォーマンスについて議論することが可能になった。本書では、モーションキャプチャを用いて3つの異なる状況を想定したダンスを可視化し、定量的な分析をおこなうことで、ダンサーが状況に合わせた演じ分けをおこなっていることを明らかにしている。

国立劇場という場が、ダンス教育の役割を担い、プロのダンサーの間で伝統的ダンスが継承され、さらにはその劇場においてあらたな演目が創りだされてきたことは大変興味深い。本書を通じて、エチオピア都市部で育まれてきた伝統的なダンスが変化し続けてきたものであることを改めて理解できる。エチオピアのダンスだけではなく、エチオピアで育まれてきた音楽や芸術文化活動に関心がある方にもおすすめしたい一冊である。

第31回日本ナイル・エチオピア学会学術大会最優秀発表者エッセイ※

Susumu Aihara

相原進

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、首都アディスアベバにあるエチオピア国立劇場所属のプロのダンサーたちの経歴にかんする聞き取りをもとに、技術習得の場と働く場をめぐる状況および、ダンサーたちのキャリア形成の特徴を明らかにすることである。

本研究では2017年8月から2019年3月にかけてアディスアベバ市内の国立劇場およびレストラン3軒にて現地

調査をおこなった。また、2020年8月から2022年4月にはコロナ禍で現地調査をできなくなったことに伴い、インターネット経由でFacebookメッセージを用いて聞き取りをおこなった。調査対象者は国立劇場の伝統音楽部門所属のダンサー15名(男性8名、女性7名)であった。2022年4月時点での対象者の平均年齢は男性30.4歳、女性33.0歳、全体31.6歳であり、ダンス歴の平均は男性17.1年、女性18.2年、全体17.6年であった。国立劇場の所属期間の平均は男性7.1年、女性10.2年、全体8.5年であった。聞き取りは半構造化インタビューによっておこな

い、2019年3月までに対象者全員に1回目の聞き取りを対面で実施した。2020年8月以降、インターネット経由での聞き取りを各対象者に2回ずつ実施した。

3. アマチュア時代の経歴

ダンサーたちは全員がコミュニティ、学校、教会でダンスを経験していたが、これらが直接プロの技術の下地となったと感じているダンサーはいなかった。彼らのほとんどは、アマチュアとしてダンスグループなどで学んだことでプロになれたと考えていた。アマチュア時代のダンスの学び方としては、12歳の時点でダンスを学べる学校に進学したのが2名、アマチュアのグループへの参加が11名、プロのグループでの無給の見習いが1名、国立劇場などでの無給での見習いが7名、国立劇場などでの非公式の見習いが2名、18歳以降に有料の専門学校に入学したのが1名であった。アマチュア時代の学び方の特徴として、無料で学ぶ方法が誰にでも開かれていることが挙げられる。アデイスアベバ市内にはアマチュアグループが多数存在する。メンバーは基本的に無給であるが、参加費や授業料などは発生しない。また、プロのグループでも無給の見習いの仕組みがあり、たとえば国立劇場では1年に1度か2度、見習いの参加者を募集している。ダンサーたちはこれらの場において、プロから直接指導を受けることができていた。

アマチュア時代のもう1つの特徴として、良い指導者やグループに巡り会えるかは運次第という点が挙げられる。たとえばT.T(男性)の場合、8歳から計3つのアマチュアグループに参加し、劇場での見習いにも1度参加して、21歳で国立劇場での採用に至った。一方で、Y.L(女性)は、ダンス未経験の状態から、1つのグループで学んだだけで国立劇場に採用された。Y.Lは以下のように述べている。

「家族が教育熱心で、18歳までは勉強に専念した。それまでダンスの経験はまったくなかった。19歳の時にダンサーを目指し始めた。プロのT氏とM氏(どちらも男性)が近所でアマチュアのグループを立ち上げた。彼らはハガル・フィキル・シアターに所属する有名なダンサーだった。最初の2年間はダンスの動作を1つずつ学び、3年目の1年間はお互いに教えあった。所属した16人のうち5人がプロになれた。他のグループよりもプロになれた人の割合は多いと思う」

調査対象者の全員が国立劇場に採用されたとはいえ、Y.Lのようにスムーズに採用に至ることもあれば、紆余曲折を経て国立劇場にたどり着く場合もあった。学びの場が無料で誰にでも開かれている一方、その質の差が大きいという実態があると考えられる。

4. プロになって以降の働き方

国立劇場のダンサーの場合、昼間は国立劇場、夕方から深夜にかけてダンスを鑑賞できるレストランなどで働くことが多い。昼間の職歴として、アデイスアベバ市内の劇場、陸軍・空軍・警察附属のバンドなどでダンサーとして働いた事例があった。また、全員が夜間にレストランで働いた経験があり、2022年4月の時点でも10人がレストランで働いていた。

働き方をめぐる特徴の1つとして、流動性の高さが挙げ

られる。転職回数を見ると、昼間の職場での転職を経験したのは8名で、転職回数の平均は1.9回であった。夜間の職場での転職を経験したのは11名で、転職回数の平均は2.5回であった。また、2名が国外での出稼ぎを経験していた。流動性の高さの理由は2つあり、1つは不安定な雇用である。W.M(男性)の例を挙げる。彼はレストランで3回の解雇を経験していた。1回はレストランのオーナーが伝統的なダンスの出し物をやめて流行歌に切り替えたことによるもので、あとの2回はレストランの閉店が原因であった。もう1つの理由は、ダンサー側も就業時間や給与面での好条件を求めて転職するからである。先に挙げたW.Mの場合、27歳以降、他のレストランから高い給与とポジションを提示され、引き抜きで2回転職していた。一方、昼間の職場での転職にかんしては、3名が、劇場の格と国外進出の展望を理由に挙げた。彼らは、将来的に国外で活動するほうが稼ぎも多くなり、そのためには、より格の高い国立劇場でのキャリアのほうが有利であると考えていた。

5. 結びに変えて-コロナと内戦を経たダンス業界の変化

本研究は国立劇場のダンサーについて、技術習得と労働の場に注目して、彼らのキャリア形成の特徴を明らかにした。ただ、この調査には、未完結の問題が1つ残っている。それはコロナ禍と内戦からの、ダンス業界の復興である。

2022年9月に久々にエチオピアへの渡航が叶ったものの、状況は大きく変わっていた。国立劇場のダンサーたちはレストランなどでの仕事を再開し、コロナ前の生活を取り戻しつつあった。しかし、中堅クラスのダンサーの多くが現場を去った。レストランでは新規雇用された10代のダンサーによって中堅の抜けた穴を埋めていた。若手にとって大きなチャンスが訪れたとも言えるのだが、残念ながらパフォーマンスのレベルは低下していた。できればダンス業界の復興を事例として明るい研究をしたいので、若手のダンサーたちの奮起と、中堅ダンサーたちの業界復帰に期待している。



編集後記

ご寄稿いただいた皆様、ありがとうございます。おかげさまで今年度も無事に計画どおりNLを刊行することができました。(松波康男)



JANESニュースレター No. 30-2

2023年3月23日配信

編集・配信：日本ナイルエチオピア学会

編集委員：松波康男、相原進、清水信宏

表紙写真：グンダ・グンド修道院

撮影：清水信宏（2014年12月）

1ページ写真：アンバサダに建築中の高層ビル（アディスアベバ）

撮影：松波康男（2023年1月30日）